

## 中学校保健体育科教員における 生徒指導の対応に関する研究

福場久美子\*・藤田主一\*

### Approach to Effective Student Guidance by Teachers of Health and Physical Education in Junior High School: A Study

Kumiko FUKUBA\* and Shuichi FUJITA\*

Our aim was to survey and examine an effective approach toward student guidance for adoption by Teachers of Health and Physical Education in Junior High School. The results revealed that a receptive relationship worked as an effective approach in providing student guidance and improved the attitude of students in school life. Therefore, it was proposed that teachers adopt a receptive relationship toward students to improve students' attitude as this approach plays an important role in providing effective student guidance.

**key words:** Teachers of Health and Physical Education in Junior High School, student guidance, approach, receptive relationship

#### 問 題

文部科学省(2010)は「生徒指導提要」に「生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」と示している。また、中学1~3年生の各学年とも、教員からの「ソーシャル・サポート」が「安心感」、「正当性」に影響を与えている(中井・庄司, 2006)ことから、教員による生徒指導は、児童生徒が有意義で充実した生活を送るために重要であり、教員は生徒指導における効果的な対応について考える必要があると言える。国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2010)は「生徒指導の議論においては、問題行動等が起きた後の事後の対応(問題対応)に目が向きがちですが、生徒指導の取組の中心は児童生徒に対する日々の働きかけ(健全育成)にあります。」と指摘しており、問題によっては事後の対応では取り返しのつかないこともあり、事後対応から未然防止へとシフトしていくことの重要性が述べられている。このことから、日々の生徒指導における効果的な対応について着目することは、問題行動等が起きた後の事後対応から、未然防止に繋がり、さらに生徒の健全育成にもよい影響を及ぼすことが考えられる。

中学校、高等学校の運動部活動参加について、文部科学

省(2013)は「中学校で約65%、高等学校(全日制及び定時制・通信制)で約42%の生徒が参加(平成24年度日本中学校体育連盟、全国高等学校体育連盟、日本高等学校野球連盟調べより)」していることを示している。また、国立青少年教育振興機構(2016)によると、全国の公立中学校2年生の部活動への所属の現状について「運動部に所属している」が68.6%、「文化部に所属している」が20.2%であることから、中学校保健体育科教員は、他教科の教員と比べ、学校で生徒と過ごす時間が多いと考えられる。このことから、生徒の健全育成のため、部活動の指導をしている中学校保健体育科教員に対して、生徒指導における効果的な対応について呈示することは重要であると考えられる。そこで本研究は、部活動の指導をしている中学校保健体育科教員を対象に生徒指導における効果的な対応について調査・検討を行うことを目的とする。

#### 方 法

**調査対象** A大学にて開催された教員免許更新講習会に参加した保健体育科教員および養護教員に質問紙調査を実施した。回答を得られた153名のうち、中学校保健体育科教員で部活動指導をしている49名(平均年齢41.0歳、SD=8.5)を分析対象とした。

**調査内容** 「今まで、効果的だった生徒指導の方法をお聞かせください。」に対して、「①受容の関わり」「②児童生徒主体の問題解決」「③教員主体の問題解決」「④指導」「⑤周囲への協力要請」「⑥居場所と関係作り」「⑦その他」の生徒指導の対応に関して、当てはまる項目に回答する内容であった。①~⑥の選択肢は角南(2013)を参考にした。次に選んだ回答に対して、具体的な方法について自由記述にて回答を求めた。また、生徒指導の対応によって効果を実感した生徒の態度についても自由記述にて回答を求めた。

**調査時期** 平成28年8月中旬に実施した。

**倫理的配慮** 調査対象者へは調査実施前に研究の目的、調査内容の説明を行い、同意を得られた者のみ回収をした。調査は集合調査法にて実施した。本研究は、研究者の所属機関の倫理審査委員会の承認を受けた。

**分析方法** 統計解析ソフトウェアIBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0を使用してテキストマイニング分析を行った。分析は感性分析を用いた。カテゴリ作成は、頻度ベースを使用し、出現頻度の下限は3回とした。統計解析ソフトウェアが自動的につけたカテゴリ名について、より分かりやすいカテゴリ名となるように一部変更した。

#### 結 果

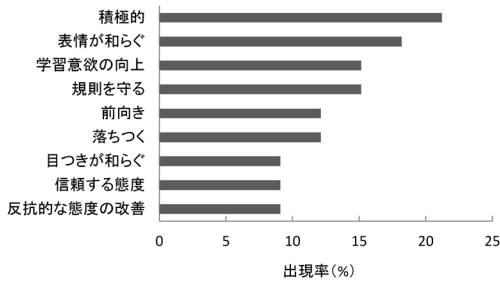
Table 1は生徒指導の対応における選択割合及び、各項目の自由記述のカテゴリと出現率を示したものである。Figure 1はTable 1の生徒指導の対応において、効果を実感した生徒の態度についてカテゴリと出現率を示したものである。

\* 日本体育大学体育学部

Faculty of Sport Science, Nippon Sport Science University,  
7-1-1 Fukasawa, Setagaya-ku, Tokyo 158-8508, Japan

**Table 1** 生徒指導の対応における各項目の選択割合及び抽出カテゴリと出現率

	選択割合 (%)	カテゴリ	出現率 (%)
受容的関わり	69.4	傾聴	52.2
		生徒理解	21.7
		個別対応	21.7
		交換ノートの活用	13.0
居場所と関係作り	57.1	傾聴	52.6
		協力依頼	26.3
		生徒理解	21.1
児童生徒主体の問題解決	40.8	傾聴	50.0
		生徒理解	28.6
指導	40.8	傾聴	46.2
		厳しく指導する	15.4
周囲への協力要請	49.0	相談する	29.4
		協力依頼	23.5
		連携する	23.5
教員主体の問題解決	14.3	抽出不可	
その他	2.0	抽出不可	



**Figure 1** 生徒指導の対応によって効果を実感した生徒の態度

考 察

Table 1において、生徒指導における効果的な対応「受容的関わり」「居場所と関係作り」「児童生徒主体の問題解決」「指導」の4項目で共通して抽出されたカテゴリは「傾聴」であった。「傾聴」の次に多く共通していたカテゴリは「生徒理解」であった。「生徒理解」について文部科学省(2010)は「児童生徒理解は、一人一人の児童生徒を客観的かつ総合的に認識することが第一歩であり、日ごろから一人一人の言葉に耳を傾け、その気持ちを敏感に感じ取ろうという姿勢が重要です。」と示していることから、「傾聴」し「生徒理解」を深める受容的な関わりは生徒指導において効果的な対応であると考えられる。また、生徒の話しを「傾聴」し「個別対応」が必要であると判断された場合、別室での面談、「交換ノートの活用」により、生徒との関係を築くことも効果的な対応であることが示唆された。「指導」項目において「厳しく指導する」のカテゴリが抽出された。

文部科学省(2010)は「生徒指導は『厳しさ』を望みがちですが、一方で『やさしさ』こそが児童生徒の指導の本性に合うともいわれます。そのどちらとも大切であり、必要であるといえます。」と示していることから、生徒の話しを「傾聴」したうえで、「厳しく指導する」ことも場合によっては必要だと考えられる。「周囲への協力要請」においては、他の教員へ「相談する」「協力依頼」をすること「連携する」のカテゴリが抽出された。このことから、教員は生徒指導における対応で困難が生じた場合、一人で抱え込まず、他の教員へ「相談する」「協力依頼」「連携する」ことが重要であると考えられる。以上の結果から、生徒指導では「傾聴」「生徒理解」といった受容的関わりを主とする対応が効果的であることが示唆された。

上記から Figure 1 では、受容的関わりが主である生徒指導の対応による生徒の態度を示していることが言える。Figure 1 について、出現率が高かった生徒の態度4つは「積極的」「表情が和らぐ」「学習意欲の向上」「規則を守る」であった。高井(2001)は、他者からの受容感と関連があったものとして、自己受容、自尊感情、感謝・安らぎ感などを報告している。よって、生徒指導において「傾聴」「生徒理解」といった受容的な関わりである対応をとることにより、生徒の学校生活での態度が改善されたと考えられる。

部活動の指導をしている中学校保健体育科教員の生徒指導は、受容的関わりで対応し、尚且つ、他の教員へ相談、協力依頼、連携を取ることで生徒の態度の改善に効果があると示唆された。よって、生徒への受容的関わりによる働きかけは、問題の事後対応から未然防止に繋がることが考えられる。

引用文献

国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2010 問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方 (<https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/shienshiryou2/2.pdf>)

国立青少年教育振興機構 2016 青少年の体験活動等に関する実態調査(平成26年度調査)資料集 ([http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/107/](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/107/))

文部科学省 2010 生徒指導提要 教育図書

文部科学省 2013 運動部活動の在り方に関する調査研究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～ ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/jyujitsu/\\_icsFiles/afildfile/2013/05/27/1335529\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/_icsFiles/afildfile/2013/05/27/1335529_1.pdf))

中井大介・庄司一子 2006 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因 教育心理学研究, 54, 453-463.

角南なおみ 2013 子どもに肯定的変化を促す教師の関わりの特徴—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成— 教育心理学研究, 61, 323-339.

高井範子 2001 他者からの受容感と生き方態度に関する研究—存在受容感尺度による検討— 大阪大学教育学年報, 6, 245-254.

(受稿：2016.11.25; 受理：2017.3.30)